【学力向上フロンティアスクール中間報告書】

都道府県名	香川県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	さ　ぬ　き　市　立　富　田　小　学　校								
学　年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	2	2	1	2	1	1	1	１０	１５
児童数	５１	４３	３２	４４	３９	３６	2	２４７	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

生きる力を身につけた児童の育成
――― 個を大切にした学習や活動を通して ―――

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

１年～６年算数科
　学習内容に系統性があり，学習の進度や理解力にはかなりの個人差があるので，習熟度差に応じた指導が最も必要な教科である。児童の実態を捉えた少人数授業を通して，児童一人一人に学年の基礎・基本の内容を十分に定着させるために全学年で取り組む必要がある。

(2)　年次計画

平成14年度

○　テーマ
　生きる力を身につけた児童の育成
　　――― 個を大切にした学習や活動を通して ―――

○　研究の見通し
　算数の学習において，学習指導過程の工夫や個に対する支援・評価を工夫した個を大切にした学習指導を行えば，基礎基本を確実に身につけ，豊かな社会性を併せ持った確かな学力ある児童が育つであろう。

○　研究内容・方法
　内　容　・　算数科の基礎・基本の定着
　　・　豊かな社会性の育成
　　・　基礎的な知識や技能の定着

　方　法　①　<u>学習指導過程の工夫</u>
　　・基礎・基本の明確化
　　・指導形態の工夫（少人数指導・ＴＴ指導・合同授業等）
　　・学習形態の工夫（個別学習・ペア学習・グループ学習等）
　　・教材・教具の開発
　　②　<u>関わり合いのある学習指導過程の工夫</u>
　　・１単位時間内で学び合い，交流活動を取り入れた学習活動
　　・　単位内において個別活動と交流活動の適切な組み合わせ
　　③　<u>個に対する支援・評価</u>
　　・個の理解（診断テスト・個人カード等）
　　・個に応じた支援
　　・評価の工夫

平成15年度	○　テーマ 生きる力を身につけた児童の育成 ――――　個を大切にした学習や活動を通して　―――― ○　研究の見通し 　少人数加配が２名となり，全学年で少人数指導を実施し，児童の実態や教材に合った学習指導過程の工夫や個に対する支援・評価を工夫し，より確かな基礎学力の定着や個に応じたきめ細かな指導の実現を図る。 ○　研究内容・方法 内　容　・算数科の基礎・基本の定着（昨年度の中間報告では，国語科での実践研究を計画していたが，全学年に少人数担当が入ることになり，昨年度の実践を生かし，系統性を捉えた指導ができるため，算数科に絞った授業研究を行った。） ・豊かな社会性の育成 方　法　①　<u>教育課程・時程での工夫</u> ・少人数授業の指導体制と職員の共通理解 ・指導形態（少人数指導・ＴＴ指導・合同授業等）に合わせた時間割の工夫 ②　<u>児童の変容調査</u> ・個の理解（診断テスト・個人カード等） ・個に応じた支援 ・評価の工夫 ③　<u>関わり合いのある学習指導過程の工夫</u> ・学習形態の工夫（習熟度別・課題別・方法別等） ・教材・教具の開発 ・学び合い，交流活動を取り入れた学習活動
平成16年度	○　テーマ 生きる力を身につけた児童の育成 ――――　個を大切にした学習や活動を通して　―――― ○　研究の見通し 　少人数授業において，学習指導過程や個に対する支援・評価を工夫し，個を大切にした学習指導を行えば，基礎基本を確実に身につけ，豊かな社会性を併せ持った確かな学力ある児童が育つであろう。 ○　研究内容・方法 内　容　・　２年間の研究の成果を生かして，引き続き算数科で研究を継続する。単元のねらいや児童の実態に合わせて，習熟度別少人数授業のコース分けや学習課題・教材教具を工夫すると共に，指導と評価の一体化により個の変容を捉え，さらに成果が上がる方法の研究を深めていく。 ・　保護者への授業公開と啓発活動と，地域周辺の学校への授業公開を進め，意見をもらい，研究の検証をはかる。 方　法　①　地域・家庭との連携の強化 ②　課題の明確化と実践研究 ③　研究成果の普及（研究発表会等の実施）

(3)　研究推進体制

・**学習指導過程の工夫部会**と**個に対する支援・評価部会**を設定し，それぞれの研究部会での研究を基に提案授業を行い，随時，指導方法や評価方法を見直しながらよい方法を追求する。

・**現教推進委員会（校長・教頭・教務主任・現教主任・現教推進部・少人数担当）**では，部会間や学年団の調整を行ったり，研究内容や方法の立案を行ったりして，円滑で効率的な現職教育の運営を行う。また，常に研究推進の状況を評価し，軌道修正を行う。

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１　研究の成果

(1)　本校の少人数授業における基本的な考え

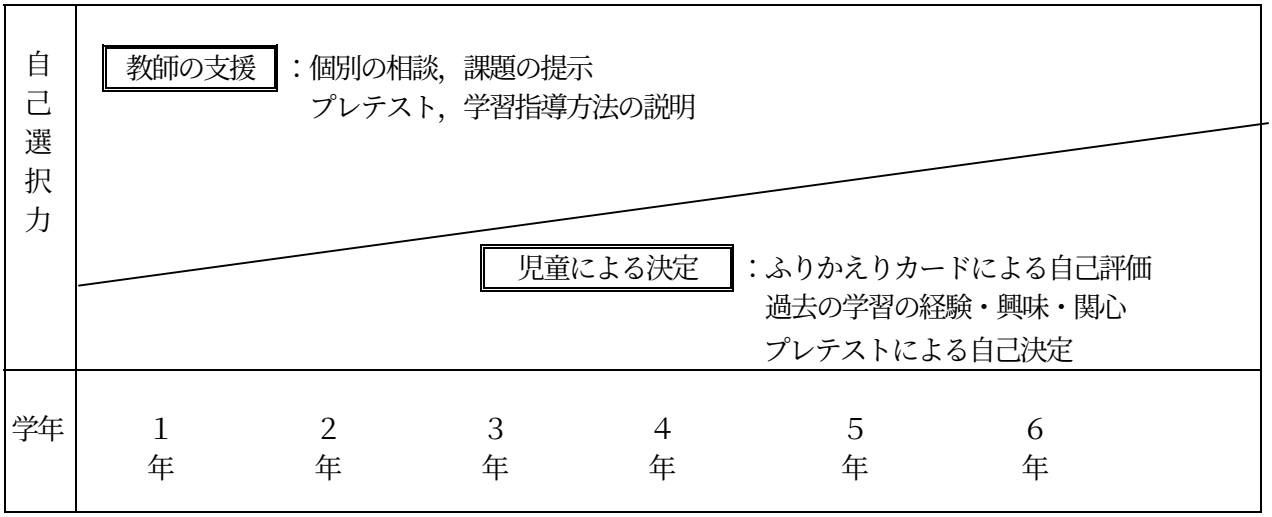
・　プレテストの実施によって把握した児童個々の習熟度差や児童の発達段階を考慮して少人数グループ編成の方法を決定する。（習熟度別・課題別・等質・ＴＴ）

・　グループの選択は，児童自身の自己選択である。ただし，選択決定要因としてプレテストの結果や自己の興味・関心，教師との相談がある。低学年ほど教師との相談の割合が大きくなる。

・　少人数授業において，少なくとも小単元においては同じグループで授業を行うことを原則とするが，単元のある時点においてグループの変更の可能性は残しておく。

・　どのグループの授業であっても確かな学力をしっかりと身につけさせるために，算数的活動や児童と児童，または，児童と教師の相互交流を重視する。それにより，押しつけでない児童自身の概念や言語による課題解決の方策や技能，知識，概念が作られると考えた。

発達段階を考慮したコース選択の工夫



(2) 教育課程・時程での工夫

①　指導形態に合わせた時間割の工夫

・　２名の少人数担当者を下学年と上学年の担当とし，全学年の算数の時間に配置する。空き教室を活用し，中学年活動室・上学年活動室を設定して，少人数グループに分かれての学習を組めるようにした。１年は，各学級でのＴＴ指導としたが，３学期からは習熟度別少人数授業も取り入れた。

・　２年は，２学級を解体しての少人数授業を組んでいたが，児童の実態から担任が替わると児童が落ち着かず，また，３グループでは進度差が大きくなり，学級担任が授業時間以外での補充学習を取り入れにくくなったことから，６月からは，時間割を再編成し各学級での少人数学習とした。

・　４年は，２学級を解体しての少人数授業を実施し，２学級の算数の時間を同じ時程とした。オリエンテーションでは，中学年活動室で合同授業を行い，コース分けの後，各教室に移動できるようにした。

・　３年・５年・６年は，単学級なで，少人数授業とＴＴ指導を効果的に組み合わせて指導できるようにした。

・　また，４～６年は，２時間続きの時間割とし，途中でコース分けをしたり，具体操作や交流を取り入れたりする時間を十分確保できるようにした。

(3) 児童の変容調査

①　学習状況調査

・　学習状況調査の結果を全県と比較し，各教科の平均点でみると成果はあまり表われていないようにみえる。しかし，下記のように正答率分布でみると，正答率９０～１００の児童の割合が高くなっていることが分かる。また，全体的に得点率が高くなっていることが読み取れる。昨年度１年間，少人数担当が入り少人数授業を取り入れてきた６年生は，研究授業など一部の単元にしか少人数担当が入っていなかった４年よりも顕著な成果が表われていて下位の児童がいなくなっている。５年については，習熟度の個人差が大きい学年であり，今年度は，障害児学級の児童もテストを受けているが，それだけの原因ではないであろうと考えられる。昨年度は，教材・教具を工夫して楽しく学べる学習活動を組んできて，計算などの表現処理の力は付いているが，思考力の観点からみると十分に到達できていない児童が多か

った。また，１４年度よりも大きく下回った結果は，定着を図るための補充指導が十分でなかったのではないかと考察される。

・　学習状況調査で十分到達できなかった内容については，研究授業で取り上げ，より効果的な指導方法や教材・教具を工夫し，校内研修の場で共通理解を図ってきた。

【学習状況調査正答率の比較】

	正答率	0～10	10～20	20～30	30～40	40～50	50～60	60～70	70～80	80～90	90～100
６年	14 年度	0	5.5	2.8	2.8	8.3	11.1	19.4	13.9	19.4	16.7
	15 年度	0	0	0	0	9	3	24.2	18.2	12.1	33.3
５年	14 年度	0	0	0	0	0	5.3	13.2	13.2	28.9	39.5
	15 年度	2.5	0	2.5	0	7.5	10	10	12.5	20	35
４年	14 年度	22	22	0	0	0	11.4	8.9	11.1	31.1	33.2
	15 年度	0	2.2	2.2	0	0	2.2	2.2	15.9	38.6	36.4

②　少人数授業に対する意識調査

・　７月には，３年～６年，１２月には，２年～６年にアンケート調査を行った。その結果から，算数が少人数授業になって「よく分かるようになった」の割合が高くなっていた。また，「算数の授業でどんな学習スタイルで勉強するのがいいですか」という問に対しては，半数の児童がコース別を選択している。児童の実態に合わせた少人数授業を実施することにより，児童も少人数授業の効果を捉えていることが読み取れる。

（算数が少人数授業になって）	７月		１２月
よく分かるようになった	**・・・４４％**	**→**	**４９％**
少し分かるようになった	・・・３７％	→	３６％
以前と変わらない	・・・１５％	→	１２％
少しわからなくなった	・・・　２％	→	２％
全くわからなくなった	・・・　３％	→	１％

（どんな学習スタイルで）	
担任の先生だけ	・・・１６％
ＴＴで	・・・３５％
コースに分かれて	**・・・４９％**

③　自己評価カードの活用（ポートフォリオ的な評価）

（診断テスト・振り返りカード・ワークシート・ノート）

・　**指導と評価の一体化**を図り，**学びの確認**と**個の変容**を捉え，**個に応じた指導**を展開するために毎時間の振り返りカードや授業で使ったワークシートなどは算数ファイルやノートに保存していった。

算数ファイル
確認表

・　１年生では，このファイルを家庭に持ち帰り，保護者に見てもらうと共に，**一言励ましの言葉を記入してもらう「確認表」**を作成した。保護者からの一言が大きな励ましとなっている児童も多い。また，保護者も授業の様子に関心が高くなり，宿題などの家庭学習時に積極的に関わってくれる保護者も多い。

・　５年A児は，確認テストや県版テストでは，１００点をとることが多いが，「自分はじっくり考える方がいいから。」といつも，基礎コースを選択する。１学期の振り返りカードでは，意欲面で「もう少し」をつけることが多かった。「四角形の面積」を求める学習で，いろいろな求め方を見つけ，友達との交流ができてから自己評価が高くなってきた。A児にとっては，少し難しい問題に挑戦し，自分の考えを友達に認められることが意欲につながっていると考える。

(4) 関わり合いのある学習指導過程の工夫

①　本校の少人数授業の形態

ア　習熟度別少人数授業

（チェックテストをもとに基礎・発展のコースに分かれる。児童が自己選択する。）

発展コース：学習課題に対してまず，自力解決を図り，考えたことをもとに，教師や他の児童と意見や考えを交流させながら解決していくスタイル

基礎コース：学習課題に対して，教師と交流したり，隣の児童とペアを組んで意見を交流したりして，解決していくスタイル

イ　課題別少人数授業

（難易度に差がある２つの学習問題を事前に提示して，児童が自己選択する。）

相互交流を大切にして学びあえる過程を生かすと同時に，課題の難易度に差を設け習熟度を加味したスタイル

・学習課題を児童が選択することにより意欲を持って取り組めることをねらった。

・教材の特徴から課題を変える方が望ましい。

ウ　等質少人数授業

・様々な習熟度差のある児童があつまっていることにより，学び合い，気づき合いを重視したスタイルで，グループ間に習熟度差がないようにする。

エ　ＴＴによる授業

（教師が２人で協力して，一つの学習集団を指導する。）

・低学年においては，教師や児童集団の構成が替わらないので，児童が安心感を持ちながら学習に取り組めると同時に個に応じた指導ができる。また，導入時において，全体に課題を同じようにつかませたり，終末時に補充・発展を行ったりするときに行う。

②　学習指導過程や基礎コース，発展コースのねらいにあった教材・教具の工夫

・学習過程それぞれにおいて教材・教具を工夫していった。

ア　課題設定の工夫（つかむ）・・・学習問題の確かな把握を

・　児童がこれから学習に取り組もうという意欲がもてるもので，問題を正確に把握できるものを工夫した。　（２年「かけ算」４年「面積」６年「平均」別紙資料）

イ　自力解決の場面（みつける）・・・その子なりの考えが生かせる自己解決を

・　児童一人一人が具体操作をしていく過程で課題解決の糸口を見出せるものを工夫した。

（１年「たすのかな・ひくのかな」５年「四角形」別紙資料）

ウ　交流の場面（深める）・・・一人一人のよさを生かした交流を

・　課題解決した児童が友達や先生にうまく説明できるものであると同時に，それを聞いた友達が課題解決の道筋が分かりやすい教材教具を工夫した。

（２年「かけ算」３年「かくれた数はいくつ」４年「面積」）

エ　学習のまとめ・発展（まとめる・ひろげる・生かす）・・・新たに追求したくなる問題を

・　算数を生活化していく楽しいゲームにしたり，発展・補充問題を児童一人一人が難易度に応じて選んだりできるように工夫した。　（２年「算数とせいかつ」６年「平均」）

③　学び合い，交流活動

・　毎時間の学習指導過程や単元の学習指導計画の中で，どこで・どんな交流を・どんな支援をと授業研究を通して探り，交流の意味と意義がはっきりしてきた。交流のためには，自分の考えをしっかり持たせる支援も重要なポイントである。

・　少人数担当の発展コースで自分の考えをしっかり出し，友達との相互交流ができた児童は，自分の学級に帰るなり担任の先生に，**「今日の勉強は，とても楽しかった。いろんな考えが出て，どの考えでも解けたよ。」**と報告していた。友達と共に学ぶ喜びや楽しさを成就できることが次の学びにつながり，しいては，豊かな社会性を身につけることができる。

(5)　スキル学習の実施

朝の裁量時間を活用して**漢字・計算・読書のドリルの時間**を設定していたが，２学期から**視写指導**も取り入れた。

①　学習状況調査の結果を分析して

国語科では，読む力，書く力を

算数科では，数学的な考え方を

５年生視写の実践から

9/9　（目標タイム３分）・・・59.3%

10/ 1　（目標タイム３分）・・・82.1%

11/21　（目標タイム７分）・・・87.5%

・　国語科で段落や重要な語句や接続詞，指示語などにこだわりながら文脈に即して読み取ったり，読み取ったことをまとめたりする力をつける。

・　改行や句読点の打ち方などの基本的な文章表現のきまりをおさえながら繰り返し指導し，書くことに慣れさせる。

・　算数科では，題意をつかむ活動を大切にする。

②　２学期から視写指導を取り入れての成果

・　最初は，１字１字の指導であったが，書くことに慣れ，単語や文節，文でまとめて書くことができるようになった。それと共に集中力が増してきた。

・正しく書くこと・ていねいに書くこと・速く書くことの順に大切に指導する。

２　今後の課題

・　研究成果を生かし，算数科における学習内容の系統性や児童の発達段階を考慮し，効果的な少人数編成や指導過程についてさらに工夫する。

・　児童の自己選択力を高め，適切なコース選択ができるようにプレテストや自己評価カードの内容や取り方を工夫する。

・　習熟度別コースにおいて基礎コース・発展コースの学習問題やねらいをどのように設定すれば，さらなる基礎・基本の定着につながるか，追求する。

・　習熟度別少人数授業の各コースにおいて，学ぶ楽しさや自力解決の成就感，新たな学習意欲につながる教材・教具の開発や効果的な提示の仕方・支援のあり方について工夫する。

・　交流のあり方を工夫したり，交流の基となる，読む・書く・聞く・話す等の基礎学力や基本的な学習習慣を培ったりするために全職員が共通理解して取り組む。

・　保護者にさらなる理解を得るために情報提供を工夫したり保護者からの声を取り上げたりする場を設定する。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取り組み

１　基礎的・基本的な内容の定着

・　県学習状況テスト・観点別状況テスト（１５年４月，２～６年）・単元別確認テスト・県版テスト

２　情意面（興味・関心・意欲）

・　児童（自己評価カード・アンケート調査７月・12 月）・保護者（アンケート調査１０月・懇談会等）

・　観点別学力状況テスト（４月）　　・　教師（アンケート調査１２月）

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

・　毎年度末に「研究のあゆみ」を作成し，地域周辺の学校に配布している。

・　１５年度は，現職教育での授業研究を同地域の小・中学校に公開し，研究討議会で意見をもらった。

・　学力向上フロンティアスクール地区協議会において，本校の取り組みを発表し，同じフロンティア校や周辺の学校から意見をもらった。（7月・２月）

・　１５年度は，研究成果普及のためのＨＰ公開の準備をしてきた。１６年度には，ＨＰを公開していく。

・１６年度は，学力向上フロンティア研究発表会を開催し，保護者・地域・近隣の学校に公開する。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　□１５年度からの新規校　■１４年度からの継続校

【学校規模】　□6学級以下　■7～１２学級
□１３～１８学級　□１９～２４学級
□２５学級以上

【指導体制】　■少人数指導　■Ｔ．Ｔによる指導
□一部教科担任制　□その他

【研究教科】　□国語　□社会　■算数　□理科
□生活　□音楽　□図画工作　□家庭
□体育　□その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　■有　□無